

Title	青池愼一先生の「社会学」
Sub Title	
Author	李, 光鎬(Lee, Kwangho)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.7- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青池慎一先生の「社会学」

李 光鎬

先生が亡くなられてから、2つの追悼文を書いた。一つは、『三田評論』の編集者の方からのご提案で、先生との出会いや個人的なエピソードを「追想」したものである。もう一つは、日本社会心理学会からお話をいただき、研究者・教育者としての先生の基本的なスタンスを回顧したものである。今回は「あの頃の三田社会学」という特集のタイトルがついているので、青池先生の「社会学」（または「社会心理学」）について、大学院で受けた授業や16年間（！）学部ゼミで先生をサポートしながら見聞きし、学んだことを回想してみようと思う。

昨年の三田社会学会大会のシンポジウムのために、青池先生の社会学はどういう社会学だったのだろうと考えていたときに、浜日出夫先生が最終講義でおっしゃっていたことを、ふと思い出した。私は残念ながら浜先生の最終講義に出席することはできなかったが、社研の紀要に載った最終講義の原稿を読ませていただいていた。その中で浜先生が「私たちの少し前の先輩たちは、マルクスかパーソンズを学んで社会学者になった」と書いていらしたのを思い出し、「あ、なるほど、そういえば青池先生は、どちらかというところパーソンズ派だったんだ」と合点したのである。授業などで、実際にパーソンズ (Talcott Parsons) の社会学に言及されることもあったが、それよりももっと頻繁に言及されていたのは、パーソンズの指導を受けたマートン (Robert K. Merton) のことだった。学部ゼミの時間に、彼の著書 *Social Theory and Social Structure* に紹介されていた機能分析の枠組み(順機能・逆機能／顕在的機能・潜在的機能) や中範囲理論などを力を入れて説明されていたのを思い出す。例えば、マス・コミュニケーションの機能論に関しても、ジャーナリズム研究などではラスウェル (Harold D. Lasswell) の機能論がよく参照されていたが、青池先生は、マートンとラザースフェルド (Paul F. Lazarsfeld) の多分に社会心理学的な、個人への影響を想定した機能論、すなわち、地位付与、社会規範の強化、麻酔化、水路化などの機能に言及することが多かったのである。

そして、ラザースフェルドらが著書 *People's Choice* などで展開した2段階流れ仮説やオピニオンリーダーの対人的影響に関する研究は、先生のコミュニケーション研究の中心的な枠組みの一つだった。マートンやラザースフェルドの影響を強く受けたのが、普及学の体系化を行ったロザーズ (Everett M. Rogers) だったから、先生が彼の普及学の体系を高く評価し、それを日本に広めようとしたのも納得できる。そう考えると先生の社会学は、アメリカの機能主義社会学を背景に、ラザースフェルド流の社会調査法を用いる実証的なスタイルの社会学（そして、コミュニケーション学、普及学）だったと言える。

一方で、いまこういう文脈で振り返ってみると笑ってしまうような話だが、私は日本に来る直前に韓国の延世大学大学院に提出した修士論文で、実はマルクス主義のメディア理論をベースにした研究を行ったばかりであった。韓国の経営者連合会が発行主体になっていた主要経済紙の社説において、韓国の労働運動がどのように論じられていたかを、イギリスの政治経済学的なメディア研究、そしてアルチュセール (Louis Pierre Althusser) の「イデオロギー的国家装置論」やグラムシー (Antonio Gramsci) の「ヘゲモニー論」などを参照しながら分析していたのである。1980年代の韓国社会は民主化を求める学生運動が激しかった時代で、学生の間では、出版も所持も禁止されていたマルクス主義の社会学が流行っていた。ただ、私が通っていた延世大学新聞放送学科の教授陣は、ほとんどがアメリカの大学で学位を取られ

た方々で、あのロジャーズさんの直属の弟子に当たる方（この方が青池先生を延世大学の訪問教授として招聘してくれた）もいたので、学部・大学院を通じて私が受けた教育は、基本的にはアメリカの社会学、アメリカの社会心理学、アメリカのマスコミュニケーション研究であった。私が大学 1 年の時に受けた社会学の授業では、スメルサー (Neil J. Smelser) が書いた *Sociology* をテキストにしていたが、彼もパーソンズと関係の深い社会学者である。ロジャーズの普及学も、学部 4 年生の時に英語の原典 *Diffusion of Innovations* をテキストにして学んだ（関係ない話だが、当時その科目を担当していたアメリカ帰りの若い非常勤講師が、昨年までムンジェイン政権の初代外務大臣を努めたカンジョンファ氏である）。

私が受けてきた教育がこういう内容であったから、来日してすぐ先生の学部ゼミに出させていただいたときから、先生が指導される内容についてはとても馴染みがあったし、多分先生も、私がそのような学問に触れてきたことにすぐ気づかれたと思う。私は学部の卒業論文では、ロジャーズとキンケード (Kincaid D. Lawrence) のコミュニケーションの収斂モデル（これもロジャーズの普及学で参照されていた、青池先生お気に入りのコミュニケーションモデルなのだが）を批判的に検討する内容のものを書いたが、先生に卒論のことを聞かれてこのことを話した際に、目を大きくして大変喜んでくださったのを覚えている。

ただ、学問の内容には近いところがあっても、研究に対する姿勢や取り組み方にはかなり違うところがあった。韓国で私が受けてきたアカデミックな訓練というのは、たくさん読み、多くの知識を獲得することに重点が置かれていたように思うが、先生は、たくさん読むよりは、「正確に」読むことを求めている、一字一句、時にはあまり本筋でないように思われる箇所についても、こだわっていらした。英語の文献を読む授業では、助動詞の意味を適当に解釈してごまかしたりすると怒られた。読むだけでなく、文章を書くことにおいてもそうで、「正確に」書くこと、そして十分に分かっていないことは書いてはいけないのだということを言われ続けた。

先生が書いた文章を読めば分かることだが、先生は強迫的なほど慎重な書き方をする方だった。装飾のない淡々とした事実の記述と引用の徹底、そして断定の回避。ご自身の解釈や評価などは本文ではなく、すべて注に書くというスタイルである。晩年のご著書『ニュースの普及過程分析』を刊行された際には、「李君、私の本は注が面白いんだ。注をよく読んでください。私がどういうことを考えていたのかは注を読めば分かります。」とおっしゃっていた。

冒頭にも書いたとおり、先生が亡くなられてから、日本社会心理学会の会報に短い追悼文を書くことになったが、その文章のタイトルを「中途半端な知識はいい迷惑である」というものにした。これは、NHK の教育放送でやっていた『アルフ』という子供向け番組の主人公アルフが番組の中で言っていたことだが、私はまさにこの言葉が、学問や知識の生産に対する先生のスタンスをそっくりそのまま表していると思う。先生のこのような厳しい姿勢は、教え子や弟子たちに深く内面化されているに違いない。

これとは逆に、例えばイノベーションの普及やオピニオンリーダーの研究など、先生はご自身の研究テーマを弟子たちにあまり勧めることがなかった。私たちの研究テーマをとにかく尊重してくださった。私の博士論文のテーマは、ニュースの生産過程におけるニュースソースの分布や役割に関する内容で、普及学やコミュニケーション学より、どちらかというところジャーナリズム研究に近いものだった。それでも先生は、研究テーマについては何もおっしゃらなかった。私が、慶應に着任した後も、研究の方向性については特に何もおっしゃらな

かったが、先生が成城大学からも退職される頃になったある日、三田の談話室でお会いしたときに、何か一つご自身の研究テーマを受け継いでほしいと言われ、少し驚いたことがある。もちろん半分冗談で、象徴的な意味の言葉だったが、「遺言だ」とも言われた。私も何か先生の研究を一つくらいは次の世代に引き継がなきゃと思っていたところだったし、ニュースメディアが大きく変化している時期でもあったので、先生のニュース普及研究を新たに展開してみようと思い、同門の鈴木万希枝さんと一緒に研究をスタートさせた。インターネット時代におけるニュース普及過程の研究であった。それからは、先生に聞いてみたいこと、先生に聞いてほしいことがたくさん出てきて、いつか札幌に行ったときには、生ビールにジンギスカンを食べながら、いろいろお話できることを楽しみにしていたのに…

「私の恩師はね、青池慎一という先生だったんだけどね…」と、私はわりと自分の授業の中で先生の話を持ち出すことがある。なぜか先生に言われたことは、有無を言わさぬ自信をもって学生たちに伝えられそうな気がするからだ。三田の社会学には世代を超えて伝わる古臭い知識があることを自慢したい気持ちもあるし。私もあと7年、先生の「社会学」に私の「社会学」を少しだけ上乘せして、一人でも多くの学生に残していきたい。

【文献】

- 青池慎一(2012). ニュースの普及過程分析, 慶應義塾大学出版会.
- 李光鎬(2020). 恩師との日々ー青池慎一先生を偲んで, 三田評論 2020年4月号.
- 李光鎬(2020). 「中途半端な知識はいい迷惑である」ー青池慎一先生を偲んで, 日本社会心理学会会報, 222号, 2020年3月27日.
- 浜日出夫(2020). 社会学再入門ー我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか, 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 人間と社会の探求, 89, 75-85.
- Kincaid, D. Lawrence (1979). The Convergence Model of Communication, East-West Center.
- Lazarsfeld, P. F., Berelson, B., & Gaudet, H. (1968). The people's choice. In The People's Choice. Columbia University Press.
- Merton, Robert K. (1968). Social Theory and Social Structure, Free Press.
- Merton, R. K., & Lazarsfeld, P. F. (1948). Mass communication, popular taste, and organized social action. The Communication of Ideas. Harper.
- Rogers, Everett M. (1983). Diffusion of Innovations, 3rd ed., Free Press.
- Smelser, Neil J. (1984). Sociology, Prentice-Hall.

(いー ごあんほ 慶應義塾大学文学部)